

| 著書、学術論文等の名称 | 単著 共著 の別 | 発行又は発表 の年月 | 発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称 | 概 要 |
|---|----------------|---------------|-----------------------------|--|
| 1 (著書) ナーシンググラフィカ 成人看護学概論 | 共著 | 2021年1月 | メディカ出版 第4 版1刷 | 成人看護学の教科書である。第6章学習の特徴と看護について説明している。 (総ページ数:302頁) (担当ページ:pp.115~136) |
| 2 (著書) ナーシンググラフィカ セルフマネジメント | 共著 | 2021年3月 | メディカ出版 第3 版7刷 | セルフマネジメントを支える諸理論について解説している。成人教育学について説明している。 (総ページ数:246頁) (担当ページ:pp.39~44) |
| 3 (著書) 経験型実習教育 | 共著 | 2015年12月 | 医学書院 第1版1 刷 | 経験型実習教育は、1996年に安酸が提唱した実習教育である。二井矢は、教師の実践的力量から教育効果をまとめた。 (総ページ数:267頁) (担当ページ:pp.253~262) |
| 4 (学術論文) 医療政策における「自立した患者」が内包する課題 | 単 | 2011年 | 日本看護科学会誌 31巻4号 | 医療政策は新自由主義に基づいて、患者の自己責任を前提とする「自立した患者」を目指している。政策によって医療格差が生じ、様々な問題を引き起こしていることを明らかにした。 (ページ数:55-63頁) (著者名:芥川清香) |
| 5 (学術論文) 教科書からみた患者教育 変遷の概観 | 単 | 2012年 | 日本看護医療学会 雑誌 14巻1号 | 日本の看護教科書は、医学書院の高等看護学講座(1952年発行)がはじまりである。看護教科書で患者教育がどのように取り扱われ、いかなる方法論が説明されてきたかを分析した。 (ページ数:10-18頁) (著者名:芥川清香) |
| 6 (学術論文) 戦後の患者教育の教育理念 と実践の変遷 | 単 | 2014年 | 日本看護研究学会 雑誌 37巻1号 | 看護師の患者教育は、戦後から1980年代までに方法論的側面から学際的視野を広げ、独自の学問領域を喚起させたことを明らかにした。 (ページ数:75-82頁) (著者名:二井矢清香) |
| 7 (学術論文) 看護基礎教育における患者 教育の成立過程－戦後から 1990年代の教育の変容－ | 単 | 2014年 | 日本看護学教育学会 誌 24巻1号 | 戦後の看護基礎教育において、患者教育はカリキュラム改正によって歴史的に生み出され、1980年代から問題解決学習が積極的に実践されてきたことを明らかにした。 (ページ数:41-54頁) (著者名:二井矢清香) |
| 8 (学術論文) 戦後日本70年の患者教育 の変遷からみた看護の軌 跡 | 単 | 2016年 | 日本看護科学会誌 36巻1号 | 患者教育の変遷を、看護基礎教育と臨床現場の実践という2つの視座から検討し、戦後70年の看護の発展を明らかにした。 (ページ数:9-18頁) (著者名:二井矢清香) |
| 9 (学術論文) 看護における患者の「自立」 がもつ意味に関する歴史的 変遷 | 単 | 2016年 | 日本看護医療学会 雑誌 18巻2号 | 患者の自立の意味は、1980年代~2000年代から「自律」を包含するようになり患者の状況によって多様な意味をもつようになった。 (ページ数:31-40頁) (著者名:二井矢清香) |
| 10 (学術論文) 1980年代からの看護におけ る患者教育の変遷－患者の 意思決定の尊重と学習援助 型の患者教育の視座から－ | 単 | 2017年 | 日本看護研究学会 雑誌 40巻1号 | 看護における患者教育は「教える」ことを基盤とする特徴がある。その一方で、科学的な方法論を根拠とした実践を発展させてきた歴史をもつことを明らかにした。 (ページ数:57-66頁) (著者名:二井矢清香) |
| 11 (学術論文) 先輩－後輩関係から学ぶピ アラーニングの思考過程 | 共 | 2021年 | 日本看護学教育学会 誌 31巻2号 | ヴィゴツキー理論を活用しながら、1年生が援助的關係をどのように意識し行動していくのか、ピアラーニングの思考過程を明らかにした。 (ページ数:57-68頁) (筆頭:二井矢清香) |